

【論文】

七高僧が明らかにしたこと

青木玲<sup>①</sup>

はじめに

「正信偈」依釈段の冒頭の四句に、

印度<sup>シ</sup>西天之論家<sup>ノ</sup> 中夏<sup>カ</sup>日域之高僧<sup>ス</sup>

顕<sup>シ</sup>大聖興世<sup>ノ</sup>正意<sup>ヲ</sup> 明<sup>ス</sup>如来本誓<sup>ニ</sup> 機<sup>ニ</sup>

印度・西天の論家、中夏・日域の高僧、

大聖興世の正意を顕し、如来の本誓、機に應ぜることを明かす。

（『教行信証』「行巻」・

『顕浄土真実教行証文類 翻刻篇』一四〇頁〔漢文〕、『真宗聖典』二〇五頁〔書き下し〕）

と述べられている。「印度・西天の論家」は、インドの論家、つまり、龍樹と天親を指している。一方、「中夏・日域の高僧」は、中国と日本の高僧、つまり、曇鸞・道綽・善導（以上、中国）、源信・源空（以上、日本）を指している。依釈段では、この三国七高僧一人ひとりが讃えられるが、それに先立って、七高僧が一貫して何を顕し、何を明らかにしたのかについて述べられている。それが、「大聖興世の正意を顕し、如来の本誓、機に應ぜることを明かす」である。このことについて、曾我量深は「七祖出現の使命」<sup>②</sup>と

述べている。

それでは、「七祖出現の使命」とは何なのか。また、七高僧を貫くものは何なのか。これらのことについて、「正信偈」依釈段冒頭の四句を通して明らかにしていきたい。

### 一、依経段と依釈段

まず最初に、「正信偈」全体の構造を確かめておきたい。「正信偈」は、大きく二つに分けられる。前半は依経段、後半は依釈段である。「正信偈」の直前の文（偈前の文）には、次のように述べられている。

しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に閱して、仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りて  
曰わく、  
〔教行信証〕「行巻」・『真宗聖典』二〇三頁

「大聖の真言」とは、釈尊が説いた真実の言葉、特に『大無量寿経』を指している。「大祖の解釈」とは、『大無量寿経』の意を伝えた七高僧の著作である。親鸞は、「大聖の真言に帰し」て依経段を作り、「大祖の解釈に閱して」依釈段を作ったのである。依経段の中でも、阿弥陀仏について説かれた部分を弥陀章、釈尊について説かれた部分を釈迦章と言う。以上をまとめると、次のようになる。

- ・ 依経段（弥陀章） 「法藏菩薩の因位の時」〔『真宗聖典』二〇四頁〕
- （釈迦章） 「如来、世に興出したまうゆえは」〔『真宗聖典』二〇四頁〕
- ・ 依釈段 「印度・西天の論家」〔『真宗聖典』二〇五頁〕

さて、依経段の結びには、次のように述べられている。

弥陀仏の本願念仏は、邪見憍慢の悪衆生、

信樂受持すること、はなはだもって難し。 難の中の難、これに過ぎたるはなし。

〔「教行信証」「行卷」・『真宗聖典』二〇五頁〕

ここには、繰り返し「難」という言葉が出てくる。「難」とは、釈尊が説いた教えが難しいという意味ではない。釈尊が説いた教えは、右の四句で言えば「弥陀仏の本願念仏」である。「弥陀仏の本願念仏」を「信樂受持すること」は、「邪見憍慢の悪衆生」にとつて「はなはだもって難し」であり、「難の中の難」であることを明らかにしているのが、依経段の結びの言葉なのである<sup>③</sup>。

このことを受けて始まるのが依経段である。そうすると、三国七高僧が「大聖興世の正意を顕し、如来の本誓、機に応ぜることを明かす」のは、「弥陀仏の本願念仏」を「信樂受持すること」が甚だ難しい「邪見憍慢悪衆生」のためと見ることができさるだろう。

## 二、大聖興世の正意

先ほど、依経段について「七祖出現の使命」と確かめたが、曾我量深はさらに、

翻つて七祖出現の使命を按ずるに、要するに「大聖興世の正意を顕し」、及び「如来本誓機に應ぜることを明かす」に在る。  
〔「七祖教系論」・『曾我量深選集』一・一五九頁〕

と述べ、「大聖興世の正意を顕す」ことを「第一の使命」、「如来本誓、機に應ぜることを明かす」ことを「第二の使命」と示している<sup>④</sup>。

「第一の使命」の「大聖」とは、偈前の文に「大聖の真言」とあったように、釈尊のことを指している。「興世」は、世に現れ出ることである。釈尊がこの世に現れ出た正意、つまり、出世本懷を顕すのが、七

高僧の「第一の使命」である。

釈尊の出世本懐については、依経段釈迦章の冒頭に示されていた。

如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり。

五濁悪時の群生海、如来如実の言を信すべし。 『教行信証』「行巻」・『真宗聖典』二〇四頁

ここには「如来、世に興出したまうゆえは」とあり、依釈段には「大聖興世の正意」とあるが、釈尊はどのような「世」に出世したのだろうか。それは、「五濁悪時の群生海」・「邪見憍慢悪衆生」が生きる「世」であろう。親鸞は、弥陀の本願「ただこのことひとつ」<sup>⑤</sup>を説くために五濁悪世に出世したのが釈尊である、と見ているのである。

ここで、釈尊の出世本懐を明らかにする文について、親鸞の思索の跡を確認したい。

■ 弥陀本願

如来所<sup>ユ</sup>以<sup>エ</sup>興<sup>ハ</sup>出<sup>シ</sup>世<sup>マフニ</sup> 唯<sup>ムトナリ</sup>説<sup>ス</sup>

五濁悪時群生海

应<sup>シ</sup>信<sup>ス</sup>如来如実言<sup>ノヲ</sup>海<sup>ヲ</sup>

(『顕浄土真実教行証文類 翻刻篇』一三八頁)

この四句について、次の三箇所訂正が見られる。

(1) 如来所以興出世…「如来」の右の「釈迦」を塗抹する。左にも塗抹あり。

(2) 唯説弥陀本願海…「本願一乗」を塗抹する。

(3) 応信如来如実言…「釈迦」↓「如来」、さらに「如来」↓「如来」(朱書き)。

(同前・註参照、傍線筆者)

(1) では、親鸞は当初「如来」の右に「釈迦」と書いていたが、後に塗抹している。また、「如来」の左に何が書かれていたかは不明だが、右と同じように塗抹している。これについては、(3) と併せて考察したい。

(2) では、当初「唯説本願一乗海」と書いていたが、「本願一乗」を塗抹し、その右に「弥陀本願」と書いている。

当初書いていた「一乗」は、『法華経』「方便品」に、

十方仏土中には、ただ一乗の法のみあり。二なく、また三なし。

(『大正大蔵経』九・八頁上段)

と説かれる、すべての人が平等に仏に成る教えである。親鸞は、「真実の教を顕」す『大無量寿経』について「一乗究竟の極説」<sup>⑦</sup>と云う。また、「一乗」について、

「一乗」は大乗なり。大乗は仏乗なり。……中略……大乗は、二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は、一乗に入らしめんとなり。一乗はすなわち第一義乗なり。ただこれ、誓願一仏乗なり。

(『教行信証』「行巻」・『真宗聖典』一九六頁、中略筆者)

と述べている。「一乗」を真に成り立たせるのは、『大無量寿経』に説かれる本願の他にないことを表しているのが「ただこれ、誓願一仏乗なり」であり、「本願一乗」という言葉である。

さて、「本願一乗海」と「弥陀本願海」とを比べると、言葉を訂正することによって「弥陀」が加わっていることが分かる。親鸞は、「唯説弥陀本願海」について、

ひとえに弥陀の願海一乗のみをとかんとなり。

(『尊号真像銘文』・『真宗聖典』五三一頁)

と解説している。「正信偈」から「一乗」という言葉は削除しているが、『尊号真像銘文』において「弥陀の願海一乗のみ」と、「一乗」の言葉を加えて「唯説弥陀本願海」を確かめている。このことを踏ま

えると、「正信偈」の出世本懷を明らかにする文においては、「弥陀」という言葉が必要だったと考えられる<sup>⑧</sup>。

(3)では、当初「応信釈迦如実言」と書いていたが、「釈迦」の上に重ねて「如来」と書き、さらに「如来」の上に朱で「如来」と書いている。この訂正は、(1)の「如来」の左右の塗抹とも関わるものであろう。では、「如来」と書くことよって、親鸞は何を明らかにしているのだろうか。

親鸞は、「如来所以興出世 唯説弥陀本願海」について次のように解説している。

「如来所以興出世」というは、諸仏の世にいでたまうゆえはともうすみのりなり。「唯説弥陀本願海」ともうすは、諸仏の世にいでたまう本懷は、ひとえに弥陀の願海一乗のみのりをとくことなり。しかれば、『大經』には、「如来所以 興出於世 欲拯群萌 恵以眞実之利」ときたまえり。如来所以興出於世は、如来ともうすは、諸仏ともうすなり。所以というは、ゆえというみことなり。興出於世というは、世に仏いでたまうともうすみことなり。欲拯群萌は、欲というは、おぼしめすとなり。拯は、すくわんとなり。群萌は、よろずの衆生をすくわんとおぼしめすとなり。仏の世にいでたまうゆえは、弥陀の御ちかいをときてよろずの衆生をたすけすくわんとおぼしめすとすべし。

〔尊号眞像銘文〕・〔眞宗聖典〕五三一頁

「如来所以興出世」について「諸仏の世にいでたまうゆえはともうすみのりなり」、「唯説弥陀本願海」について「諸仏の世にいでたまう本懷は」と述べている。また、この二句が依っている『大無量壽經』の「如来所以 興出於世 欲拯群萌 恵以眞実之利」<sup>⑨</sup>の「如来」についても、「如来ともうすは、諸仏ともうすなり」と解説している<sup>⑩</sup>。弥陀の本願を説くことは、釈尊の出世本懷であるとともに、諸仏の出世本懷である。そのことを明らかにしているのが、「如来」という言葉である。ここに、釈尊の出世本懷は、と

りもなおさず諸仏の出世本懐であると確認できる<sup>⑩</sup>。

このように、親鸞は「ただ弥陀の本願海を説くために出世した「如来」を「諸仏」と明示している。これによって、「ただ弥陀の本願海を説くのが、諸仏の出世本懐であることを明らかにしている。諸仏は、「弥陀の御ちかいをときてよろずの衆生をたすけすくわんとおほしめすとしるべし」とあるように、弥陀の本願を説いて、「五濁悪世のよろずの衆生」<sup>⑪</sup>が分け隔てなく救われる道を開いたのである。つまり、ここに「弥陀の願海一乗」という意味を確かめることができるだろう。

では、親鸞にとって諸仏とはどのような存在なのだろうか。そのことを次に考察したい。

### 三、師法然との出遇いの意味

親鸞にとって諸仏と言えば七高僧であり、その代表は「本師・源空」<sup>⑫</sup>、つまり、師法然であろう。ここでは、『教行信証』に引用される法然の『選択本願念仏集』の文を通して、諸仏の出世本懐を確かめていきたい。

『教行信証』に引用される『選択本願念仏集』の文は、「諸仏称名の願」<sup>⑬</sup>を明らかにする「行巻」の次の一箇所だけである。

『選択本願念仏集』源空集 に云わく、南無阿弥陀仏 往生の業は念仏を本とす、と。

また云わく、それ速やかに生死を離れんと欲わば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を闔きて、選びて浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲わば、正雜二行の中に、しばらくもろもろの雜行を抛ちて、選びて正行に帰すべし。正行を修せんと欲わば、正助二業の中に、なお助業を傍にして、選びて正定

を専らすべし。正定の業とは、すなわちこれ仏の名を称するなり。称名は必ず生まるることを得、仏の本願に依るがゆえに、と。已上  
 (『真宗聖典』一八九頁)

ここには、「選択本願念仏集」という題号、「源空集」という撰号、「南無阿弥陀仏 往生の業は念仏を本とす(南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本)」という題下の十四字、そして、「また云わく」と示され、三選の文が引用されている。これらは、

比叡山延暦寺宝幢院黒谷源空聖人の真像

『選択本願念仏集』に云わく、「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」文

また曰わく、「夫速欲離生死 二種勝法中 且闍聖道門 選入浄土門 欲入浄土門 正雜二行中

且抛諸雜行 選応帰正行。 欲修於正行 正助二業中 猶傍於助業 選応専正定。 正定之業者 即

是称仏名。 称名必得生 依仏本願故」文

また曰わく、「当知生死之家 以疑為所止 涅槃之域 以信為能入」文

(『尊号真像銘文』・『真宗聖典』五二六頁)

とあるように、法然の真像に記された銘文である。また、題号と題下の十四字については、

元久乙の丑の歳、恩恕を蒙りて『選択』を書しき。同じき年の初夏中旬第四日に、「選択本願念仏集」の内題の字、ならびに「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」と、「釈の綽空」の字と、空の真筆をもつて、これを書かしたまいき。  
 (『教行信証』「化身土卷」・『真宗聖典』三九九頁)

と述べられるように、元久二(一二〇五)年、親鸞三十三歳の時、書写した『選択本願念仏集』に法然の真筆で書かれた言葉である。このことを踏まえると、親鸞が法然からたまった教えは、「選択本願念仏集」と「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」という言葉に集約されるだろう。つまり、『選択本願念仏集』は、



「南無阿弥陀仏 往生の業は念仏を本とす」ということを明らかにするのであり、その具体的な内容が三選の文に示されていると言えよう。

『教行信証』「行巻」には、冒頭の御自釈<sup>15</sup>の後、経文が引用され<sup>16</sup>、それに続いて七高僧の文が引用されている<sup>17</sup>。この七高僧の一連の引文の中で、題号と撰号の両方が記されるのは法然だけである<sup>18</sup>。ここには、法然その人に出遇ったとともに、法然の教えに出遇ったという意味があるだろう。換言すれば、親鸞は『選択本願念仏集』を著した法然に出遇ったということである<sup>19</sup>。

前述したように、法然の教えは、その題号に示されているように「選択本願念仏」であり、「選択本願念仏」(「南無阿弥陀仏」)が「往生の業」である、ということであった。この具体的な内容として、速やかに生死を離れようと欲うならば、「聖道門を闔きて、選びて浄土門に入れ」、「もろもろの雑行を抛ちて、選びて正行に帰すべし」、「なお助業を傍にして、選びて正定を専らすべし」と三つの選びを述べ、「正定の業とは、すなわちこれ仏の名を称するなり。称名は必ず生まるることを得、仏の本願に依るがゆえに」と述べている。これによって、「称名」は「仏の本願に依るがゆえに」「必ず生まるることを得」ることを明らかにしている。

「仏の本願」を説くことは、「大聖興世の正意」であった。法然は、「選択本願念仏集」、「仏の本願に依るがゆえに」とあることから分かるように、弥陀の本願に帰依した人である。そして、

選択本願、悪世に弘む。  
『教行信証』「行巻」・『真宗聖典』二〇七頁)

と讃えられるように、「大聖興世の正意」を「悪世」において弘めた人なのである。

その意味で、『教行信証』「行巻」に引用される『選択本願念仏集』の文は、「大聖興世の正意を顕す」ものであり、法然の出世本懐を明らかにするものと言えよう。また、「聖道門を闔きて、選びて浄土門に

「入れ」は道緯の『安樂集』<sup>②</sup>、「もろもろの雑行を抛ちて、選びて正行に帰すべし」と「なお助業を傍にして、選びて正定を専らすべし」は善導の『観經四帖疏』<sup>②</sup>に基づいているため、親鸞にとつて、法然と出遇うことで、七高僧が開かれ、釈尊の出世本懐が明らかになったのである。したがって、釈尊が説き、七高僧が伝承した『大無量寿經』の教えが、『選択本願念仏集』の引文に集約して示されていると言っても過言ではない。先ほど、釈尊の出世本懐はとりもなおさず諸仏の出世本懐であると確認したが、諸仏の出世本懐の具体的な内容が依釈段において七高僧一人ひとりとして示されていくのである。

さて、これまで『教行信証』「行巻」の引文を通して、親鸞が法然から教えられたことについて確かめてきた。このことについて、『恵信尼消息』には次のように記されている。

ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみちをば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わりさだめて候いしかば、  
 『恵信尼消息』三・『真宗聖典』六一六頁

親鸞にとつて、「善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべきみち」を教えてくれたのが法然である。ここに記される「同じように」が、前述した「一乗」を明らかにしているのであり、親鸞の生涯を貫く課題であったと考えられる。

この「同じように」を実現する教えは、

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。  
 『歎異抄』第二条・『真宗聖典』六二七頁

と記されるように、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」である。そして、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という教えとの出遇いの意味を、親鸞は、

しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の曆、雑行を棄てて本願に帰す。

『教行信証』「化身土卷」・『真宗聖典』三九九頁)

と述べている。「選択本願念仏」、「仏の本願に依る」称名念仏に出遇った意味を「本願に帰す」と述べているのである。法然が帰依した弥陀の本願に、法然の教えを通して出遇ったのが親鸞だったのである。

このように、「恵信尼消息」第三通、『歎異抄』第二条、『教行信証』「化身土卷」に示される法然との出遇いは、「行卷」の引用文に集約されていると言えよう。法然との出遇いは、「選択本願念仏」・「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という教えとの出遇いであり、「本願」との出遇いである。さらに言えば、「ただ念仏して、弥陀にたすけられ」るしかない我が身、つまり、「いずれの行もおよびがたき身」<sup>②</sup>との出遇いである。親鸞において、「選択本願念仏」という教えとの出遇い、弥陀の本願との出遇い、自分自身との出遇い、これが師法然との出遇いの意味なのである。

#### 四、正信念仏

さて、これまで七高僧出現の「第一の使命」について考察してきたが、「第二の使命」は「如来の本誓、機に應ぜることを明かす」ことである。親鸞は、

おおよそ誓願について、真実の行信あり、また方便の行信あり。その真実の行願は、諸仏称名の願なり。その真実の信願は、至心信樂の願なり。これすなわち選択本願の行信なり。その機は、すなわち一切善悪大小凡愚なり。

〔『教行信証』「行卷」・『真宗聖典』二〇三頁〕

と述べるように、「選択本願の行信」の「機」について「一切善悪大小凡愚」と確かめている。では、どのようにして「如来の本誓」が「一切善悪大小凡愚」という「機に應ぜることを明らかにしたのだろうか。

前述したように、法然は弥陀の本願に帰依し、「大聖興世の正意を顕」した人であった。このことを踏まえると、七高僧は「本願に帰」し念仏して「大聖興世の正意を顕」したのであり、「如来の本誓、機に応ずることを明か」した人と言えよう。つまり、「選択本願の行信」・「正信念仏」に立つて明らかにしたのである。「正信念仏」とは、

しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に閲して、仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りて曰わく、  
 『教行信証』「行巻」・『真宗聖典』二〇三頁

とあるように、「正信偈」の名称である。では、「正信念仏」は「正信偈」のどこに表明されているだろうか。それは、冒頭の、

無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる。  
 (同前・『真宗聖典』二〇四頁)

である。「南無阿弥陀仏」と念仏申す「帰命無量寿如来 南無不可思議光」が、「正信念仏」に他ならない。そして、この二句が「六十行」・「一百二十句」<sup>②</sup>の「正信念仏偈」全体を貫いているのである。

冒頭の二句を受けて、親鸞は、

法蔵菩薩の因位の時、世自在王仏の所にましまして、

諸仏の浄土の因、国土人天の善悪を覩見して、

無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超発せり。

五劫、これを思惟して撰受す。重ねて誓うらくは、名声十方に聞こえんと。

(同前)

と述べている。「法蔵菩薩の因位の時」から、「正信念仏」の因が示されている。その因を明示しているのが、四十八願に重ねて誓われた「名声十方に聞こえん」である。親鸞は、「正信偈」冒頭の二句から従果回因して、「一切善悪大小凡愚」が念仏申すのは「名声十方に聞こえん」という誓いに依ることを明らかにしている。

このことは、「帰命」を明らかにする次の文からも確かめることができる。

ここをもつて、「帰命」は本願招喚の勅命なり。〔教行信証〕「行巻」・『真宗聖典』一七七頁

「帰命」は、衆生の煩惱を根拠として発ってきたものではなく、「本願招喚の勅命」であることが述べられている。この「帰命」において、函と蓋がびつたり合うように、「本願招喚の勅命」と「一切善悪大小凡愚」が相応する<sup>24)</sup>。つまり、「帰命」の他に「如来の本誓」も「本願招喚の勅命」もないということである。この点に、「如来の本誓、機に應ぜる」ことを確認することができる。したがって、七高僧は「如来の本誓」が「一切善悪大小凡愚」という「機に應ぜる」ことを、「正信念仏」に立って明らかにしたのである。

このように、「大聖興世の正意を顕し、如来の本誓、機に應ぜることを明かす」のは、「正信念仏」においてなされたことである。つまり、七高僧一人ひとりが本願に帰依し、念仏申して明らかにしたのが「七祖出現の使命」だったのである。

### おわりに

依釈段の冒頭に示される「大聖興世の正意」は、釈迦章に「如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり」と述べられている。七高僧は、釈尊が説いた「弥陀本願海」に帰依し、念仏申して生きていった人である。つまり、我が身を通して、「大聖興世の正意を顕し、如来の本誓、機に應ぜることを明か」したのである。ここに、「七祖出現の使命」がある。

その意味で、七高僧は、「大聖の真言」を聞いた人であり、証明した人である。「大聖の真言」を聞き、証明する人がいなければ、「弥陀本願海」が伝わることはない。この「大聖の真言」を伝えた「大祖の解釈」、

つまり、七高僧の教えを信じることを勧めているのが、「正信偈」の結びに、

弘經の居士・宗師等、無辺の極濁悪を拯済したまう。

道俗時衆、共に同心に、ただこの高僧の説を信ずべし、と。

〔「教行信証」「行巻」・『真宗聖典』二〇七頁〕

と述べられる、「ただこの高僧の説を信ずべし」という言葉である。依釈段では、「この高僧の説」が七高僧一人ひとりとして明らかにされていく。このように、七高僧を貫くものは「弥陀本願海」であり、それが「選択本願念仏」として結実していったのである。

※本稿は、第四十六回九州大谷短期大学仏教学科市民大学講座（二〇二一年七月四日）における講義を論文として原稿化したものである。

### 【註】

- ①九州大谷短期大学仏教学科。
- ②「七祖教系論」・『曾我量深選集』一・一五九頁。
- ③詳細については、拙稿「難の中の難」（『九州大谷研究紀要』四七）を参照されたい。
- ④曾我量深は、「七祖出現の使命」について次のように述べている。

蓋し釈尊の生活と他力本願との関係云何は、浄土教に於て重大なる問題である。仏説非仏説の問題、真実権化の問題は、畢竟、教主の實際生活との比觀に由りて解決せらる。即ち小乗教は最も釈尊の生活に近く、自力大乘教は著しくその生活より超離し、浄土教は全くその生活と反対に見ゆる。されば

浄土教が是等の自力諸教に対して大聖興世の正意なるを顕証することは、極めて困難にして重大なる事件である。之を決するは、即ち七祖出現の第一の使命である。

而して如来の本願は元より絶対唯一の大道なることは勿論なれども、而も絶対の大道は差別の人間の道としては余りに大に過ぎる。如来は一面は実相身なると共に、一面は為物身でなければならぬ。即ち変化の時代と差別の個人とに順応し、この時と機とに対して特別なる色彩を顕示する。即ち弥陀の本願は七祖の上には各自に現々別転の現量の事実にして普汎的な概念ではない。機に応じて変化して各別なる衆生を救済し給ふことを示すが、七祖の第二の使命である。

〔七祖教系論〕・『曾我量深選集』一・一五九頁

この「第一の使命」・「第二の使命」について、さらに次のように述べている。

かく七祖の第一の使命は、教主釈尊の真信念の上に浄土教を建設して大聖興世の正意を顕すに在るが、更に第二の使命としては、各自相異なる人格の上に本願を証験して各自に特色ある教義を建立し、之に依りて如来の本誓が機に応じて活現することを身証し給ひた。(同・一六四頁)

⑤『唯信鈔文意』・『真宗聖典』五四七頁。

⑥『教行信証』「教卷」・『真宗聖典』一五二頁。

⑦『教行信証』「教卷」・『真宗聖典』一五四頁。

⑧一二五五（建長七）年六月二十二日、親鸞八十三歳の時に書写された「専修寺本」では、「坂東本」と同じように「如来所以興出世 唯説弥陀本願海 五濁惡時群生海 応信如来如实言」（『専修寺本 顕浄土眞実教行証文類』上・一五八頁）となっている。また、同年六月二日に著された『尊号眞像銘文（略本）』は、その言葉に対して解説されている（『定本親鸞聖人全集』三・和文篇・六六〇六七頁）。したがって、

釈迦章冒頭の四句の一連の訂正は、一二五五年六月二日以前と言えるだろう。

⑨『大無量寿経』では、次のように説かれている。

如来以無蓋大悲、矜哀三界。所以出興於世、光闡道教、欲拯群萌 惠以眞實之利。

如来、無蓋の大悲をもって三界を矜哀したまう。世に出興したまう所以は、道教を光闡して、群萌を拯い恵むに眞實の利をもつてせんと欲してなり。

（『眞宗聖典』七頁〔白文〕・『眞宗聖典』八頁〔書き下し〕、傍線筆者）

この傍線部分を取って、「如来所以 興出於世 欲拯群萌 惠以眞實之利」と言っているのだろう。

⑩親鸞は、『一念多念文意』にも『大無量寿経』の出世本懐の文を引用して次のように述べている。

しかれば、『大経』には、「如来所以興出於世 欲拯群萌惠以眞實之利」とのべたまえり。この文のころは、「如来」ともうすは、諸仏をもうすなり。「所以」は、ゆえ、ということばなり。「興出於世」というは、仏のよにいでたまうともうすなり。「欲」は、おほしめすともうすなり。「拯」は、すくうという。「群萌」は、よろずの衆生という。「惠」は、めぐむともうす。「眞實之利」ともうすは、弥陀の誓願をもうすなり。しかれば、諸仏のよにいでたまうゆえは、弥陀の願力をときて、よろずの衆生をめぐみすくわんとおほしめすを、本懐とせんとしたまうがゆえに、眞實之利とはもうすなり。しかればこれを、諸仏出世の直説ともうすなり。 （『眞宗聖典』五四二頁）

ここにも、「如来」ともうすは、諸仏をもうすなり、「諸仏のよにいでたまうゆえは」、「しかればこれを、諸仏出世の直説ともうすなり」と解説するように、「如来」を「諸仏」と確かめている。

⑪親鸞は、「五濁悪時群生海 応信如来如実言」について次のように解説している。

「五濁悪時群生海 応信如来如実言」というは、五濁悪世のよろずの衆生、釈迦如来のみことをふか



く信受すべしとなり。

〔尊号真像銘文〕・〔真宗聖典〕五三一頁

「応信如来如実言」の「如来」について、「釈迦如来」と述べている。今回、この点については確かめることができなかったため、今後の課題としたい。

⑫ 〔尊号真像銘文〕・〔真宗聖典〕五三一頁。

⑬ 〔教行信証〕「行巻」・〔真宗聖典〕二〇七頁。

⑭ 〔教行信証〕「行巻」・〔真宗聖典〕一五六頁。

⑮ 〔真宗聖典〕一五七頁。

⑯ 〔真宗聖典〕一五七〜一六一頁。

⑰ 〔真宗聖典〕一六一〜一八九頁。

⑱ 龍樹は「『十住毘婆沙論』に曰わく」（〔真宗聖典〕一六一頁）、天親は「『浄土論』に曰わく」（〔真宗聖典〕一六七頁）、曇鸞は「『論の註』に曰わく」（同前）、道綽は「『安樂集』に云わく」（〔真宗聖典〕一七一頁）、善導は「光明寺の和尚の云わく」（〔真宗聖典〕一七三頁）、源信は「『往生要集』に云わく」（〔真宗聖典〕一八八頁）と示されている。

⑲ 山辺習学・赤沼智善著『教行信証講義』には、「源空集」と記されることについて次のように述べられている。

然らば何故、わざわざ源空集と記されたのであろうか。これについて二つの理由があるように思われる。

第一には因人重法の故に。これは人によつて法を重んずるということで、当時、一天四海の師宗たる法然聖人、浄土門の元祖たる源空聖人の著作された『選択集』なれば、殊更に誰人でもその所論に

耳傾けねばならぬという意がある。

第二に師教の恩厚を仰ぐが故に。親鸞聖人の夢寐にも忘るることの出来ないのは師匠法然聖人の恩教である。今この『本典』選述に際しても、感泣胸に迫るは故聖人の恩教である。この大恩を思い出し、その御述作を引き奉るについても、仰がるる師聖人の昔を思い、なつかしさ尊さに筆を走らせて源空集と遊ばされたのであろう。

〔教行の巻〕三六五頁

⑲ 『真宗聖教全書』一・四一〇頁。

⑳ 『真宗聖教全書』一・五三七～五三八頁。

㉑ 『歎異抄』第二条・『真宗聖典』六二七頁。

㉒ 『教行信証』「行巻」・『真宗聖典』二〇八頁。

㉓ 親鸞は、「相応」について次のように述べている。

「与仏教相応」は、たとえば函蓋相称するがごとしとなり。

〔教行信証〕「行巻」所引『浄土論註』・『真宗聖典』一七〇頁